

# 『星の王子さま』を改めて思う

2023. 6. 15  
美幌町図書館長 竹花 史康

6月29日は、『星の王子さま』の作者、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリが生まれた日です。それは、1900年のことでした。

サン＝テグジュペリは、もともと飛行機のパイロットでしたから、彼の作品には『夜間飛行』のように、パイロットとしての体験に基づいた作品が多くあります。しかし、戦争中の1944年、P-38偵察型で出撃しましたが帰還せず、消息不明となります。まだ、44歳という若さでした。

ちなみに、第二次世界大戦中、連合艦隊司令長官であった山本五十六が乗っていた一式陸上攻撃機を撃墜したのも、このP-38でした。

『星の王子さま』は、児童文学という位置づけではありませんが、大人になって読むと、改めていろいろなことを考えさせられます。まず思ったことは、いつのまにか子どもの自由な発想を大人の考えで決めつけたり、制限してしまっていたことです。

王子さまの小さな星にはバオバブという木がありますが、そのままにしておくと根が大きくなり星が割れてしまいます。そのため王子さまは毎日バオバブの芽を取り除くのです。今読むと、切実な地球の環境問題を思い起こしました。

この本の魅力は、サン＝テグジュペリ自身によるイラストにもあるのかもしれませんが。10代のころ手にした時、ずいぶん下手な絵だと思っていたのですが。よく見ると繊細で独創的なイラストだと気がつきます。それが物語の世界観を広げ、私たちの想像力を掻き立てるのだと思います。

『星の王子さま』のように、何度読んでも新たな気づきを与えてくれる本はそれほど多くは知りません。それは、私たちが忘れがちな大切なことを思い出させてくれるからです。

作中に出てくる有名な言葉、

「かんじんなことは、目に見えない」

改めて、噛みしめたいと思います。

